

“至 誠”（新たなる歴史に向けて）

校長便り 2018年度 第8号

みんなには始業式で白状したが、年末年始とインフルエンザでダウン。と思っていたら今度は尿道結石（若いみんなにはわからないと思う）で激痛に耐え、と今年は新年から最悪の健康状態。これを書いている時点では鎮痛剤で痛みを抑えているが、わき腹がじんじんと痛い状況が続いている。一方では、校長室の掃除に来る3年生はいたって元気だ。卒業が近くなってきたからかもしれないがひじょうに明るくて救われる思いがする。でも、3年生の皆さん、まだ卒業考査が残っているよ。キチンとそれをクリアしてね。また、インフルエンザが非常にはやっているから3年生はもちろん、修学旅行が近い2年生も十分に注意してうがい、人ごみに出るときのマスクなどしっかり予防してね。

ところで、新年になってから校内の原稿だけでこの「至誠」が8本目になっている。1日1本くらいのスケジュールなのでいろいろと頭からひねり出すのがしんどいのだが、「書くことは考えること!」。毎日頭を使うことで思考力や表現力を向上させたり、感覚を研ぎ澄ませたりすることができる。先日は3年生の「菰野学」プレゼン発表会を見せてもらったが、考えて、表現し、質問に対してまた考えて答える。このようなトレーニングは社会に出てから必要な能力を鍛えることにつながるからぜひともしんどくてもやってほしい。今回は主として対象が1・2年生になるが、4月から新たに校内で取り入れる企画について紹介したいと思う。

1. 「学びの基礎診断」

本校でも今年度から「基礎力診断テスト」を全員が受講しているが、そのバージョンアップだと考えてもらえばいい。どこが違うかというと、「基礎力診断テスト」が1年生は中学校までの、2、3年生は高校時代も含めて学校で学んだ基礎的知識がどれくらい理解・習得できているかを見るのに対して、「学びの基礎診断」では基礎的知識に加えて思考力・判断力・表現力などの資質・能力をどれくらい高めているかも評価・診断するツールになっていることだ。「学力の向上」というとみんなは基礎的知識の習得をさすと思っているかもしれないが、すでに10年も前から文部科学省では「学力」とは①基礎的な知識・技能にくわえて②知識を活用する思考力、判断力、表現力等の資質・能力、③（主体的に）学びに向かう態度、と定めている（もうすでに法的にも移行している）。社会が変わっているのだからそれに合わせて教育も学力の定義も変えていかななくてはならない、というわけだ。一方で、高校生の学力低下が著しいこともずっと指摘されており、今度の改訂は高校での学力担保の意味合いもある。とりわけ、まず基礎中の基礎である英数国の基礎的な力をこの試験で客観的に診断する、その結果に応じて授業方法や学習方法の改善につなげ、①、②の学力を向上させようとの狙いにつながっているのだ。高校からの就職はほとんどが学校推薦だからあまり企業のほうが学力を見る機会がないし、高校時代の学力が向上していないと公務員試験などの結果で如実に表れるのでそのあたりも社会は見たいわけだ。個人で就職を決めてくる大学生がSPI試験（言語、非言語の基礎学力と対応力を見る＝簡単に言えば国語

と数学の力)を課されるように高校生にもキチンとした基礎的知識と社会や仕事に必要な資質・能力が向上しているかどうかを検証する目的で全国規模で来年度から導入されることになっている。

本校では認定されたツールのうちベネッセの「基礎力診断テスト」(みんなが今年度受験したツール)を改変し、思考力・表現力を含めてその力を見るテストで実施する。1,2年生は4月、10月の2回、3年生は4月、合計5回の実践をすることで、みんなの全国レベルの客観的な学力を評価し、継続して行う中での学力の伸びを見る。さらに個人レベルでも学校全体としてもその結果を分析・内省して授業や学習方法の改善につなげる予定だ。実はベネッセのツールを使用することは副次的な効果も生む。本校も今や生徒の半数近くは進学する。いわゆる進学校では(推薦で受験する生徒でも)模擬試験を受験し、自分の強み・弱みを知ったうえで学習の改善、成績向上につなげる。おそらく1か月に1回は模擬試験を受けてスモールステップにつなげている。ところが本校では一部を除いて全国的な客観データに触れることなく志望校を決めるのがほとんどだ。必然的に「自分の志望大学等への合格可能性(推薦・AOで受験した場合)」もわからないまま多くの場合、指定校など手元にある選択肢の中から選ぶしかなくなる。指定校にはないけれどもっと自分の力を伸ばすことができる、もっと切磋琢磨できる、もっと社会に出た後もキャリアアップできる大学等があるかもしれないのに。しかし、「学びの基礎診断」を5回受験することで(校内だけでなく)自分の客観的な基礎学力・思考力・表現力を測ることができる。返却される資料の中には個人個人への学習アドバイスもついているので、受験のためのあなたの学習法や大学等へ入学してからどのような力をつけていけばいいのか(当然、社会人になっても「学び」は続くから就職希望者も自分の力をつけるための大きな参考になる)の有意義な指針になるはずだ。来年度からの「学びの基礎診断」はみんなの個人個人の能力向上、選択肢を広げるための有効なツールになる。

2. 調査書の改変とポートフォリオ

調査書とは就職や進学の際に企業や大学等へ学校から提出するみんなの学習成績やさまざまな活動を記録した資料のことだ。実は調査書の改変はすでに現1年生から始まっている。一番大きな変化は高校時代の個人活動記録を書くスペースが大幅に広がったことだ。つまり、これからの時代は学校の授業や個人の学習も大事だが、積極的に校内校外を問わず活動・探究することが評価されるわけだ。これはこれまでに何度も述べてきた社会で必要とされる資質・能力と連動する。主体性、自立性、共生を主眼に置いたキャリア教育とも合致する。勘違いしないでほしいのは「すごいもの」「すごい結果」を社会は求めているわけではないことだ。野球で甲子園に出場することは誰にもできることではない(出場できればそれに越したことはないが)。でも、自分で考え、仲間とともに活動し、目標に向かって努力することは誰にでも可能だし、そのような主体的な(学びに向かう)態度が上記の③にも書いたように今後の社会で必要とされる資質・能力になるから「調査書も変えましょう」というわけだ。

学習や活動の結果を証明するためには記録を残しておく必要がある。その活動・学習履歴を「ポートフォリオ」と呼ぶ。調査書に反映させるためにはコンパクトにまとめる必要があることからすでに教育業界ではe-ポートフォリオとして電子化することが推進されているが、私はポケットのついた個人フ

ファイルにさまざまな記録を閉じていくアナログなポートフォリオで十分だと思う。調査書で使う時に必要な部分だけをコンパクトに記載し再構成すればそんなに労力もかからない。大事なのは1年生からクラブでの賞状、校外で参加した企画のパンフレットから授業のプレゼン資料までどんどんファイリングし、時にはそれを見直し振り返り、次につなげることである。最近では生徒の自己管理能力を高めるため手帳を持たせる高校が増えてきており(産業能率手帳、ラーンズ未来手帳、フォーサイトなど)、これをファイリングすることは自分自身のためにも企業や大学等にとっても選考のための絶好のツールになる。

ここでは来年度大きく変わる部分だけを上げたが、これ以外にもアンケート結果やディスカッションを通じて変えなければならないところは変えていきたい。我々も「不易流行」だ。みんなもぜひ来年度は積極的に「ホンモノ体験」に参加して主体性、自立性、共生力、表現力、思考力、問題発見・解決力等を向上させてほしい。

3. 保護者の皆様へ

保護者アンケートを読ませていただき、予想外に?保護者の方にも「至誠」を読んでいたということがわかり、驚くと同時に感謝しています。一方で、「子どもが渡さないので読んだことがない」との声も多く聞きますので、四日市商業のHPに「校長便り(至誠)」を掲載してもらいました。トップページから「校長あいさつ」へ入っていただくと、第1号から掲載してありますのでぜひご覧ください。

(1月25日)